身辺雑感

―私がかかえている葛藤から―

津守　真

先日、ドイツOMEPから、幼稚園の現場の先生たちと行政の方々が、日独の青少年国際交流プログラムの一環で三週間来日された。私は、派遣側と受け入れ側の両方の間に立ってお世話をしたのであるが、いくつも誤解を生じた。そのひとつは、青少年という概念がドイツと日本とでは異なることが原因であることが分かった。ドイツでは、青少年（ユーゲント）事業は、法的に乳児から二十八歳までを含み、最近は老

年までも含む傾向であるのに対して、日本の概念では、青少年事業は、十六歳から二十六歳位までの年齢に対する事業であり、それに該当しないものは除外される。また、周知のように、ドイツでは幼稚園（キンダーガルテン）は保育園をも含むのに対して、日本では幼稚園は文部省、保育園は厚生省の管轄である。予算面もこれに対応して厳密な区分があるから、ドイツから見ると日本のシステムは柔軟性に欠ける。私は三週間いろいろの機会に両者の会合に出席して葛藤を経験した。今回ドイツ側代表で来られたゲラー女史は、昨年はＯＭＥＰ世界大会で横浜に来られ、これまで世界各地でのＯＭＥＰ世界理事会で何度もお会いして親しくしてきた方である。今回は同じ葛藤を日独両側からつぶさに味わって、これからどうしたらよいか、帰国される前夜十一時までも話し合った。今回は青少年事業によって派遣された優秀なドイツ語通訳がいつも同席されたので、お互いに外国語で話すことによる誤解はなくて済んだのは有り難いことだった。

私自身、これまで十三年間にわたる保育の実践の場から離れて、いま、障害をもつ大人の施設（社会福祉法人野菊寮、御殿場コロニー）のお世話にエネルギーを使って

いる。ここでもまた、新たな社会的ニードと制度との間の葛藤にぶつかっている。法的には、精神薄弱者更生施設であるが、これは五十年前に定められた名称である。現在では、精神薄弱、白痴、痴愚、魯鈍などの呼び名はほとんど差別用語であり、日常的には用いられない。親も専門家もこのような語は好まない。その居住型施設で三十年以上も過ごした人たちは、自分の選択でここに来たのではなく、もっと普通の社会環境で生活したいと願っている。しかしそれを叶えることは現行の制度では困難が多い。本誌の十二月号と一月号に私は米国におけるこの分野の一八〇度の変革について記した。日本と米国とでは社会風土が異なるから、同一には論じられないが、だからと言って現状で良いとは言えない。人間の生涯の幸せを原点に考え、社会環境を変えてゆく努力をするのが福祉と教育なのではないか。

ドイツの方々が御殿場の施設に来られたとき、話は障害をもつ人々に及んだ。ドイツでは、第二次世界大戦当時、障害者にとって暗黒時代があったという。障害者は生きている価値がないと考えられ、消しても当然との考えがあったという。ひとりの方がこの過去に言及された重い沈黙のひととき、私はこの国と私共の国とには戦争の共通の記憶があることを思った。

ドイツには精神障害者の町ベテルがあることは広く知られている。障害をもっていても神の前に人間として等しいという宗教的精神から、どの家も障害者を家族の一員として受け入れた輝かしい伝統をもつ。それが長い年月を経る間に、現代は町全体が他のコミュニティから孤立する危険も生じて来たという。一九六〇年にドイツに障害者福祉法ができて以来、人権が尊重され、コミュニティで生活するのが普通になっている。この点は、他の欧米諸国と同様である。ところが最近は別種の問題が生じている。胎内から障害の有無が分かるようになり、それに伴う弊害が心配されている。科学の進歩は良いことばかりではないと、ドイツの方々がこもごも語られた。世界中に同様の深刻な問題が起こりつつあるが、同時に、障害をもっていても「人間」としては対等であるという新しい福祉の考えが世界中に進行しているのも事実である。これは、二十世紀末の希望ではないか。

私自身、若いとき、偶然の機会に障害をもつ子どもと出会い、生涯の最終段階にまでおつきあいが続くことになった。多くのことが私から離れて行っても、このことだけは離れきれないというのは、それだけこの問題が人間社会の本質にかかわるからで

はないだろうか。私も若いころは、この子たちを弱者と見て、守らなければと情熱をもって考えたこともあった。私が生きた時代、高度成長期、社会はこの人たちを一般社会の目にふれないように隔離する政策をとった。他方には、既存の社会を規準にして、それに適応するように訓練教育することに重点がおかれた。当然ながら、それに追いつかない重度の人は底辺に取り残される。いま、世界中に、これではおかしいという考えが多くの人の胸に沸き起こっている。それには、外国人でも他人種でも差別せずに一緒に教育するインターカルチュラリズム、すなわち、異質な文化を尊重して新たな文化をつくらなければ社会の進歩はないという欧州共同体の考えも寄与している。障害もその異質性のひとつである。時の経過の中で、私自身も教育されて、障害の見方が変化して来た。そして最近は私自身の施設で、施設からホームに環境を変えると、行動の仕方が変わることを眼前に見ている。物的環境のみでなく、人間関係の心理的環境が変われば、障害をもつ人たちはもっと生きやすくなるだろう。そして社会全体がもっと人間的なものへと変わるのではないか。それは理想主義だと言われる。しかし、現に、日本以外の国では、障害にではなく、人間に重点をおくピープルファースト運動によって福祉は大きく変化している。その考え方は幼児教育を専門と

する人には容易に受け入れられるだろう。

私は月に一度、愛育養護学校の教養講座で親たちに話をしている。その度に、子どもたちが寄って来てくれるのがうれしい。子どもの中に身をおくだけで私共はなんと幸せなことか。この子どもたちが大きくなったときに、社会が今よりももっとこの人たちの価値を認めるように変化していて欲しいと切に願う。幼児教育の専門誌に、障害をもつ大人のことを毎回記すのは場違いではないかと私は何度も考えた。しかし、子どもはじきに大人になる。障害をもつ子どもの親たちは、その子たちの成長後を現状の福祉環境のままで考えるから育てる希望を失い、そのことが子どもの悩みをも大きくしている。幼児教育は大人の福祉にまで連続している。そう考えて私は自分で納得している。

次回からは、再び、「子どもの世界」を主テーマに連載したいと思っている。